# 歌と写真で綴る薩摩の脇道
## －歌三昧の史跡巡礼，その5-1－

キラメキテラス ヘルスケアホスピタル　粟　博志・高田　昌実・萩原　隆二
鹿児島大学 名誉教授　納　光弘
加治木温泉病院　夏越　祥次
県立大島病院　粟　隆志

### [第十一章：生麦事件と薩英戦争]

#### [1] 生麦事件

1862（文久2）年，島津久光は上京。そして寺田屋事件後，江戸に赴き，公武合体策の交渉（文久の改革）を行う。

なお，ここで押さえておかなければならない，最も重要な点は，久光に倒幕の意志がない事である。

重豪は，第9代将軍家重より「重豪」の名を賜り，娘は第11代将軍家斉に嫁し（広大院寧姫，篤姫，茂姫），斉彬の養女は第13代将軍家定に嫁し（天璋院篤姫），2人が御台所となっている。大名家としては，薩摩藩は，将軍家と最も血縁関係が深いのである。

文久の改革後，久光は帰国の途についたが，東海道沿いの武蔵の国生麦村（現・横浜）で，騎馬の4人のイギリス人が，結果として大名行列に乱入した。

不運な事に，この4人は，大名行列に対する礼儀を知らなかった。多分，日本に対する傲慢な優越感があったのだろう。

彼らは，観光で川崎大師に向っていたと言われる。

供回りの藩士，奈良原喜左衛門，久木村治休，海江田信義らにより（ちゃんと名前も分かっている），4人中，3人が殺傷された。

来日中の英商人リチャードソンが死亡。横浜在住の商人，マーシャルとクラークが負傷したが，神奈川のアメリカ領事館のある，本覚寺に逃げ込み，ヘボン博士（ヘボン式ローマ字で名を残す）の治療を受けた。

香港在住の商人の妻で，観光に来ていたホロデール夫人は，横浜の居留地に逃げ戻った。

知らせを受けて，救援に向かったのが，イギリス公使館付き医師ウィリアム・ウィリスである。

彼は，リチャードソンの遺体をみつけ，横浜へ運び帰った。

薩摩藩は，「3～4人の浪人が突然出てきて，外国人を討ち果した」とか「足軽が異人を斬って逃亡した」など，白を切り通し，長居は無用とばかり，国元に帰った。

イギリス側は，幕府に謝罪と10万ポンドの賠償金を要求した。この時，幕府に対する威嚇のため，仏，蘭，米，それに英の4ヶ国艦隊が横浜に入港した。

1800年代末～1900年代初頭は，植民地主義の最終段階で，安政の五ヶ国条約により，欧米列強はその利権に関し，対日姿勢で歩調を合わせていたのだ（植民地主義，帝国主義に関しては，多くの理論がある）。

薩摩藩に対しては，犯人の処罰および賠償金2万5千ポンドの要求を通告してきた。

幕末の攘夷運動の気運の高まりの中，民衆は，この事件を壮挙と受けとめ，東海道筋では「さすが薩州様」と久光の行列を迎え，更に京都（朝廷）では，外国嫌いの孝明天皇が，直々に久光の労を賞したという。

この時代の日本の情報は，短時間で欧米に伝わっていた。

ニューヨーク タイムズ紙は，非は無礼な行動をとったリチャードソンにあるとしてい

る。オランダ医師ポンペも，帰国途中のハーグで，偶然，リチャードソンの叔父に会い，事の次第を説明したという。

吉田松陰の松下村塾四天王の一人で，文武共に極めて優秀であった長州藩士，高杉晋作は，1862（文久2）年5月，五代友厚らと共に，幕府使節随行員として，上海に渡航した。

そして清国が欧米の植民地になりつつある状況などを，見聞して帰国。この体験は，下関戦争の敗戦処理に役立っている。

帰国後，攘夷運動に加わり，同年12月，薩摩に遅れてはならじ，と井上馨，伊藤博文らと共に，品川に建設中の英国公使館焼き打ちを行っている。

尊王攘夷運動は，増々勢いづく。

薩英戦争，下関戦争前夜である。

## [2] 錦江湾の砲台の状況

1853（嘉永6）年，ペリーが浦賀へ来航。薩英戦争の10年前である。

同年，篤姫は斉彬の養女となる。

『篤姫』によると，嘉永6年に篤姫の父，安芸の守忠剛（ただとき）に太守様（斉彬）じきじきお召しとの連絡がある。

書院で斉彬は，口を開いた。

『安芸殿，今和泉領内の海岸線に砲台を築くべき恰好の場所はあろうか』……「この斉彬太主になってから，串木野，久志（くし），秋目の砲台を修築し，新たに鹿児島大門口に一台築いている事から考え合わせると，錦江湾入口の今和泉領に砲台を構築する話は当然と思った。……」とある。

なお今和泉家の領地は，揖宿（いぶすき）郡や佐多郷など，薩摩半島の南端であった。

実際，1843年の八重山へのイギリス艦，1844年のフランス艦，1845年のイギリス艦，1853年のペリー艦隊の琉球来航は，よく知られている。

鹿児島市の名所，旧跡を訪れると，各所の案内板が充実しているのに驚かされる。

皆様方にも，各所を訪れた時には，案内板を一読する事を，おすすめする。

市や県，黎明館，県立図書館および尚古集成

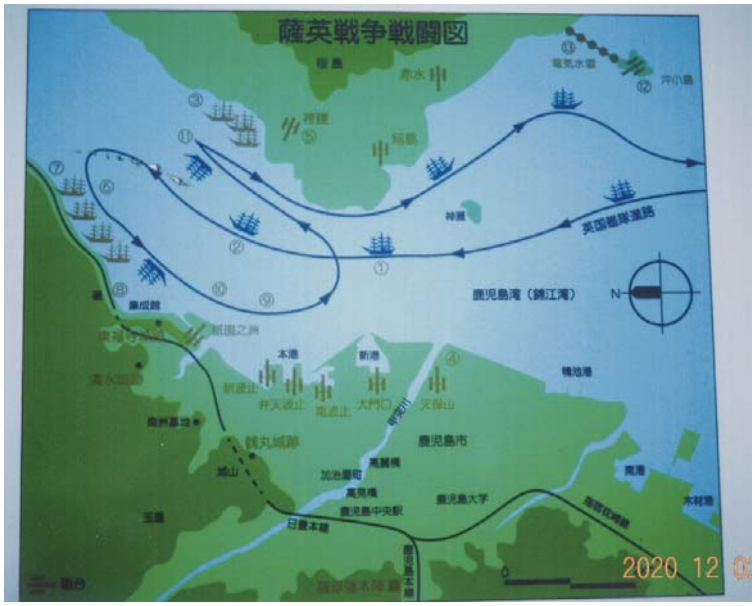


**図178　薩英戦争戦闘図と薩摩藩の砲台**
（新波止砲台跡の案内板より）

館など観光関係各所の御努力に敬意を表する。図178，179は，新波止砲台跡の案内板から，撮らせて頂いた。図178は各所で見受けられる。

さて薩摩藩では，斉彬の父，10代藩主の斉興（なりおき）の時代に洋式砲術を採用。藩士を長崎で学ばせたり，鋳造方を設置して，大砲の製造に着手しており，それを引き継いだ斉彬の時代に，外国からの防衛のため，次々に砲台を築いていった。

図178のように，薩英戦争当時，錦江湾の鹿児島沿岸には，天保山（砂揚場），大門口，南波止，弁天波止，新波止，祇園之洲の6砲台。桜島側には，袴腰，烏島（からす），赤水それに沖小島の4砲台の計10砲台があった。

特に新波止，弁天波止砲台は，鶴丸城正面に当たり，城下を守る主力砲台であった。

生麦事件後，藩は英国との開戦が不可避と考え，大操練で，実弾射撃訓練を続けて，これに備えた。中心となったのは，第12代藩主忠義と，その父，国父の久光である。

さて，薩摩藩の150ポンド砲は，飛距離は3kmと言われるが，有効射程距離は，約1kmであるのに対し，イギリスの110ポンドアームストロング砲の有効射程距離は，3〜4kmと言われる。

現在の桜島遠泳に於る，桜島小池浜から磯浜の距離は，4.2km。市街地から桜島の最狭部は，約3kmである。

薩摩の大砲の有効射程距離は，1kmである

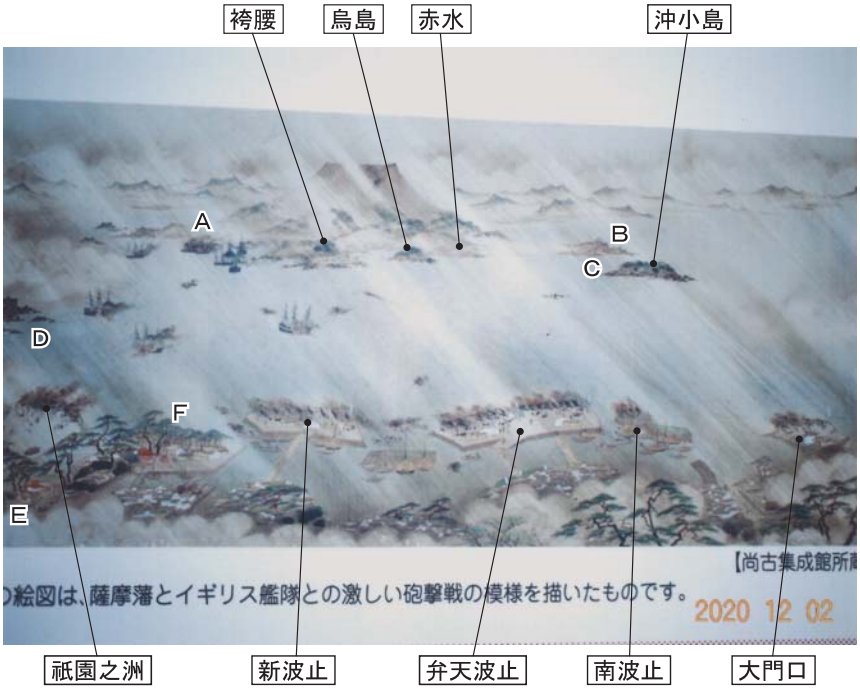


**図179　薩英戦争の砲撃戦絵図**

（新波止砲台跡の案内板より，尚古集成館所蔵）

□は砲台を示す。天保山砲台は，大門口の更に右側

A：拿捕され，焼打ちされた薩摩蒸気船
B：桜島の尖端の燃崎
C：燃崎と沖小島の間の敷設水雷（3個）
D：祇園之洲沖の岩礁
E：八坂神社
F：抱真院，神明社

から，鹿児島沿岸と桜島の中間の1km以上は，射程外となる。

従って，主要砲台は，城下の損害を減らすと共に，射程距離を補うために，海の中に突き出すように造られている（私見）。

天保14年の地図では，大門口から新波止砲台の位置と思われる間の沖に，5つの防波堤（戸波）があり，これらを有効利用して，砲台を造ったと思われる（私見）。

また砲弾も，薩摩の球形弾と異なり，イギリスは，着弾時（物に当たった時）に爆発する破壊力の大きいものであった。

### [3] 尚古集成館所蔵による，薩英戦争の7月2日の戦闘絵図

当日は，台風による暴風雨であり，画面では，左上から右下に白く，その様子が描かれている（図179）。

薩摩にとって，暴風雨の利点は，英艦の砲の照準が定まりにくい事，不利益は，風で城下の火災が拡がった事である。

詳細にみると，薩摩の全砲台で，大砲の射撃による黒煙が，立ち昇っているのが分かる。

図の左下方，祇園之洲砲台の後方には，八坂神社の赤い鳥居と社が見える。その右手の社が，抱真院，神明社である。八坂神社との間の数本の松の向こうが，稲荷川である。

祇園之洲砲台の沖に岩礁があり，浅い事が分かる。砲台前の目と鼻の先の沖合に，英艦レースホースが座礁した。

祇園之洲と新波止砲台の手前の城下が，広範に焼失した。

また，袴腰砲台の左手，小池浜沖に，薩摩の拿捕された3隻の蒸気船（青鷹丸，天祐丸，白鳳丸）が燃えているように見える。

鹿児島から見た，桜島の右尖端の燃崎と沖小島の間の海峡には，3基の水雷が敷設された。

（以上，基礎知識）

### [4] 多賀山公園から望む，現在の祇園之洲砲台跡と新波止砲台跡

図180は，祇園之洲砲台跡である。

図の手前に移設された高麗橋，その向こうに，規則正しく並木の植わった遊歩道がある。更にその先の黄緑色の木が茂っている所に，かつて砲台が並んでいた。

砲台のすぐ向こうは，右中ほどの稲荷川の分流である。その向こうの車の通っている所は，埋立地である。沖には砂州が，茶色に見える。

フェリーは，桜島の袴腰を出て，新波止砲台跡の港に向かっている。英艦レースホースは，砲台から約180m沖に座礁した。その位

**図180　多賀山から見た祇園の洲砲台跡**
黄緑の森の所が砲台跡。フェリーの所が，英艦レースホースの座礁位置。

**図181　多賀山から見た新波止砲台跡**
フェリー先端の緑色の森の所が砲台跡。右端中央が西田橋。下中央が，稲荷川に架かる橋。

置は，正に，このフェリーの位置と思われる。
左上には，桜島の端の燃崎と，その右に沖小島が遠望されるが，この間に，斉彬時代に造られた3基の電気水雷が仕掛けられた。

視線を右に向けると，手前中央に，祇園之洲公園と石橋公園の間の稲荷川に架かっている橋が見える。松並木が石橋公園で，右端中央に西田橋と西田橋門が見える。
図181で進行してきたフェリーが，上中央に見えるが，その先端の緑色の森が，新波止砲台跡である。右端上のフェリーの所が，フェリーの発着所である。

**[5] 薩英戦争**

1862（文久2）年，生麦事件が起こる。
1863（文久3）年，幕府は最終的に，イギリスに10万ポンドもの賠償金を支払う。
イギリスの次の目標は薩摩である。

・1863年6月27日，7隻の英艦隊が出現し，鹿児島沖に投錨。
・6月28日，艦隊は城下町の浜の沖，1kmに投錨。生麦事件の犯人の処罰，および2万5千ポンドを要求。
・6月29日，薩摩は，事件に責任は無いとの立場から，要求を拒否した。
　更に，黒田清隆，大山巌らがスイカ売りに変装し，英艦奪取を試みるが，怪しまれて失敗。
・7月1日，藩主忠義と久光は，開戦やむなしと決定し，本営を西田村（現・常盤）の千眼寺に定めた。鶴丸城が，艦砲の射程内と想定されたからである。
・7月2日，イギリスは，交渉を有利に進めるため，重富（現・姶良）脇元村の薩摩蒸気船，青鷹丸，天祐丸，白鳳丸の3隻を拿捕し，桜島の小池浜沖まで曳航した。
　宣戦布告なしの，このイギリスの盗賊行為をきっかけに，島津側は砲台に追討命令を発した。

それでは，7月2日の戦闘の展開と，その後の経過を見よう（図178-181）。
・正午，天保山砲台より，旗艦ユーライアラスに砲撃が開始され，次いで袴腰から砲撃が続いた。イギリスは小池浜沖の薩摩蒸気船3隻を放火。激しい砲撃戦が展開された。
・午後3時頃，弁天波止の29拇臼砲（新波止の球弾砲ともいわれる）が，見事に旗艦ユーライアラスに命中。艦長，副艦長らが戦死し，司令官キューパー提督も負傷した。
　その後，祇園之洲砲台に接近した英艦レースホースが，風や波浪のため，わずか200ヤード（180m）の沖合で座礁（図180）。
　絶好の機会であったが，この時までに祇園之洲砲台の殆どが，英艦の砲撃で破壊されており，残念ながら応戦できなかった。結局，レースホースは，僚艦に曳航され離礁した。
・午後7時半頃，砲台の無い丸腰の磯が攻撃され，たまたま停泊中の琉球船3隻などが焼失。琉球使節の琉球王子・与那城朝紀は，天馬船で危機を脱した。
　当時も琉球との交易は盛んで，城下の新橋前に琉球館があった（図26）。
　更に，砲撃や火箭（ロケット弾）により，集成館の工場群が，壊滅状態となる。
・その後，及び7月3日，城下が攻撃され，城内の櫓や門，寺社，家屋など，城下の約十分の一が焼失した。
　城下を攻撃後，艦隊は南下。この時，燃崎と沖小島の間に，斉彬時代に製造した，電気点火式水雷3基を仕掛け，待ち伏せていたが，英艦隊は沖小島からの砲撃に驚き，進路を変更したため，この作戦は不成功に終わった。艦隊は，その日は，谷山沖に停泊した。
・7月4日，艦隊は薩摩から撤退した。1週間後の11日に全艦が横浜に帰着。当時の船舶能力の高さが窺える。

英艦隊の損害は，艦の大破1隻，中破2隻。旗艦の艦長，副艦長を含む死者20人，負傷者43人であった。

これに対し，薩摩側の損害は，城下の焼失による被害は甚大であったが，市街地も含めて，死者5人，負傷者14人と少なかった。

その後の和睦談判で，薩摩はイギリスの薩摩蒸気船拿捕を強く追及した。

最終的には和睦し，薩摩は2万5千ポンド(6万3百両）をイギリスに支払った。然し，この金は幕府から借用したもので，結局，幕府に返却しなかったし，生麦事件の犯人の件も，逃亡中と主張し，うやむやに終わった。

朝廷は，薩摩の攘夷に対して，島津家に褒賞を下された。

世界最強と謳(うた)われた英海軍が，薩摩での戦闘を離脱し，横浜に退却した事は，欧米では，驚きを以って受けとめられた。

ニューヨーク タイムズは「日本を侮るべきではない。日本人は勇敢で，西洋式の武器・戦術に長じており，降服させる事は困難」と評した。

この時代，一方で植民地政策があり，一方で国際法がある。また欧米列強には日本に対する各国の思惑もあり，真意は別として，イギリス議会，国際世論は，既に幕府から多額の賠償金を得ており，更なる城下の民家への攻撃は，必要以上として，司令官キューパー提督を非難している。

いずれにせよ，斉興，斉彬の時代から，海防の重要性を十分に認識し，備えていたからこそ，植民地政策のこの力の時代に，列強の要求を無抵抗に受け入れるのではなく，互角以上に戦った事で，欧米列強の賛同を得る事ができたのである。

**291 何にても　備えあれば憂いなし**

**292 井の蛙(かわず)　世界に知らしむ　底力**

薩英戦争は，薩摩の実力を世界に示すのに十分であったし，日本国内に対しても，その力を示した。一方，英艦のアームストロング砲の威力などを，まざまざと見せつけられ，攘夷は不可能と悟り，更に眼(まなこ)を世界に向けて開く事になる。

**293 井の蛙　戦いすんで　世界知る**

**294 井の蛙　戦いすんで夜が明けて　海の広さを心に刻む**

(次号へ続く)

**英国の新聞の戦闘図**